（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏　名　長瀬（ながせ）　由美（ゆみ）

本論文は『源氏物語』における『白氏文集』を中心とする漢籍受容の諸相を解明したもので、第一篇「『源氏物語』における漢詩文受容の様相」、第二篇「『源氏物語』女主人公紫上の造型」、第三篇「平安朝漢文学と『源氏物語』」の三篇に分かたれた十章から成る。

第一篇第一章「『源氏物語』と中国文学史との交錯」は、紫式部にはもののけ等の超自然的な現象に対する合理的な思考態度が認められる一方、『源氏物語』にはそうした超自然的な現象も積極的に取り込まれていることに着目し、そこに白居易の諷諭詩や中唐伝奇小説のなかに見られる合理と非合理に対する儒家文人らしい姿勢や、虚構の方法に対する自覚の高まりと共通するものがあることを析出する。第二章「『源氏物語』と史書の接点」は、『源氏物語』に漢籍によって培われた政治社会に対する批判的な態度や歴史な認識があることを指摘。第三章「『紫式部日記』の思考の姿―白居易詩「身」と「心」詠との関連において―」は、紫式部の水鳥を詠んだ歌のなかに白氏閑適詩との注目すべき類似を指摘するとともに、平安朝の文人たちの白氏閑適詩の受容とは異なり、自らを閑適とは対極的に定位する自己省察が認められることを明らかにする。第四章「六条御息所の「心」」は、嫉妬を抑制する御息所の心理描写のうちに、女性に対する儒教的礼教的価値基準をかえって相対化する視点があることを析出する。第五章「『白氏文集』と『源氏物語』―女性の人生への眼差し―」は白居易の〈婦人苦〉に関わる詩や恋愛詩における女性の人生への眼差しを『源氏物語』が共感深く受けとめてその物語世界の形成に生かしていることを論ずる。

第二篇第一章「若紫について」は、『源氏物語』は中国文学史には類例のない表現世界を構築しえているという視点から紫上造型におけるこの物語固有の方法を分析する。第二章「朝顔巻の紫上」は『白氏文集』の古鈔本である金沢文庫本の本文によって『源氏物語』朝顔巻に白詩「琵琶行」の引用が見られることを新たに指摘した上で、紫上造型が漢詩文に描かれる「閨怨」的女性像を大きく超え出ていることを論ずる。

第三篇は、『源氏物語』の漢籍受容の基盤として、一条朝を中心とした平安朝漢文学の位相を考究する。第一章「一条朝の漢詩文における『白氏文集』諷諭詩の受容について」は、具平親王と慶滋保胤の詩文に白氏諷諭詩やそれと密接な関連を有する「策林」の摂取があることを指摘。第二章「一条朝文人の官職・位階と文学」は、大江匡衡・藤原行成・藤原為時(紫式部の父)の白詩句題詩を比較し、三者の個性を浮き彫りにする。第三章「『源氏物語』と菅原道真「九月十日」詩」は、道真の「九月十日」詩の引用を通して『源氏物語』に中国文学における述志の文学としての悲秋詩が受容されていることを論ずる。

以上のように本論文は、きわめて重要な指摘に富む重厚な論文である。第一篇第二章と第三篇第三章には、なお論証の不十分な点もあるが、それは本論文の意義を大きく減ずるものではない。よって審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。